

平成30年8月27日

松本市議会
議長 上條 俊道 様

松本市議会経済地域委員会
委員長 上條 温

経済地域委員会行政視察報告書

経済地域委員会行政視察を実施しましたので、その概要について報告します。

記

1 期 日

平成30年7月25日（水）～7月27日（金） 3日間

2 参加者

経済地域委員8人、関係理事者1人、事務局随員1人 計10人

3 視察先及び調査項目

- (1) 佐賀県唐津市
九州オルレ唐津コースについて
- (2) 一般社団法人 九州観光推進機構（福岡県福岡市）
九州オルレ推進事業について
- (3) 鹿児島県屋久島町
屋久島の自然環境を活かした観光振興の取組みについて
- (4) 公益財団法人 屋久島環境文化財団（鹿児島県屋久島町）
屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について

4 概 要

- (1) 佐賀県唐津市
日 時 7月25日（水） 15時20分～17時15分
対応者 鎮西市民センター 太田センター長、山本産業課長 他職員
商工観光部観光課 青木係長、山下氏

ア 唐津市の概要

人口 123,000人 面積 487km²

佐賀県の北西部に位置し玄界灘に面した県内第2の都市。大陸との繋

がりが深く、唐へのみなと（津）から「唐津」となったといわれる。

豊臣秀吉の朝鮮出兵の前線基地となった名護屋城跡があり、江戸時代に築城された唐津城も残っている。主な産業は観光、農業・漁業（イカ、カキ）。

イ 事業の背景・概要・課題等

新たな観光資源の開拓を目的にしたスロートレッキングコースとして「九州オルレ唐津コース」を視察した。「オルレ（OLLE）」とは、韓国済州島の方言で「家に帰る細道」の意味。2011年東日本大震災、円高等により韓国からのインバウンドが減少した。そこで九州への興味を喚起する新たな取り組みとして九州観光推進機構（翌日視察）を立ち上げ、韓国で認知度の高い済州オルレと業務提携し、九州に21のコースを設定した。その一つが唐津コースである。

「オルレ」のコース要件として、「道自体を楽しむことができること」、「舗装道路はできるだけ避けること」、「地域特有の景色や歴史があること」、「地域の協力体制があること」などを満たす必要がある。全長10から15km。コース認定には九州観光推進機構の1次選定、済州オルレの2次選定を経る必要がある。

唐津コースの最大の特徴は、自然や景観だけでなく歴史を感じることができることである。豊臣秀吉が朝鮮出兵の拠点として築城した肥前名護屋城を始め、周辺には前田利家や島津義弘など名だたる戦国武将の陣跡が残り、後半には限界などを望むコースとなっている。

観光面での効果としては、唐津コースのH29年度イベント参加者は約2,700人、うち外国人（全員韓国人）は約1,000人。（イベント時以外は自由に散策できるので人数は把握していない。）

今後の課題としては、さらに認知度を上げて新規客を獲得すること及びオルレ利用者の宿泊率が低く、消費額単価も2,065円と低いため、宿泊率、消費額の引き上げ。そのために佐賀県内3コースで連携しイベントを開催するほか、コース内にサザエのつぼ焼き屋台を設けるなど経済効果創出に取り組んでいる。

ウ 所感

私の唐津に対するイメージは唐津焼、唐津くんちなど、この街が大陸や朝鮮半島との交流の窓口を果たした歴史的な経過から、異国情緒を残した街を想像していた。しかし（たまたま見なかっただけかもしれないが）町の姿は事前の想像とは違った。

切り札となりうる産業を持たない普通の地方都市が、観光を切り口と

して地域振興を模索している姿であり、その意味で大いに参考になった。
インバウンド誘客の対象を韓国に絞ったのは、現今の日韓関係冷却化の風潮の中では意外に感じた。しかし九州における韓国との関係は、道路標識にハングルが表記されている事などを見ても、私の想像とは異なり最も近い外国であって日常の中に溶け込んでいると感じた。

(2) 一般社団法人 九州観光推進機構

日 時 7月26日(木) 10時15分～10時55分

対応者 渡邊専務理事・事業本部長、緒方副本部長(九州オルレ認定地域協議会事務局長)、海外誘致推進部 八谷次長、横山次長

ア 事業の背景・概要・課題等

一般社団法人・九州観光推進機構は、九州地方知事会と九州経済連合会、九州商工会議所連合会、九州経済同友会、九州経営者協会で構成し、2005年4月に設立された。「九州はひとつ」という共通理念のもと、観光産業を九州の基幹産業とすべく、官民一体となった観光戦略を展開、初めて九州が一体となって観光に取り組んでいる。

主な取り組みは、九州観光のロゴマーク・キャッチコピーの選定、九州アジア観光アイランド特区ガイド育成支援、観光インフラ整備～WiFi整備、Let's Drive Kyushuキャンペーン、九州オルレの立ち上げ、九州ふっこう割、中国の主要旅行社との協力、ラグビーワールドカップを契機とした情報発信事業、修学旅行素材説明会・相談会の開催、教育旅行・現地視察研修の実施などである。

2012.3～2017.3までの6年間に九州オルレ21コースへの訪問者数は297,430人、そのうち約6割が韓国人、残りが日本人である。

成果としては、日韓で200回以上報道されており九州ブランド浸透に貢献している。観光地と認識されていなかった場所に新たな観光資源を開拓した。一度に多くの人々が来るのではないので地域が疲弊しない。県市町村を超えて連携が図られる。国を超えて民間レベルでの交流が促進される。日韓友好につながる。

課題としては、九州は畜産農家が多く伝染業予防の観点から地元理解を継続していくこと。コースの維持管理は市町村の仕事であり、これを維持していくこと。今は韓国中心だがラグビーワールドカップを契機にして欧米からの誘客を進めること。消費単価を1,000円から2,000円アップすること。

イ 所感

官民共同のもとに、九州全域を対象とする観光推進組織が設置されていることに驚いた。九州7県や会員企業・団体の支援協力の基に、東アジアからの集客活動を中心として多くの成果を上げているとのことで、その組織化の取り組みと熱意に打たれた。

事務局の事業予算は年間5億円、職員数は37人、そのうち2人がプロパー職員、残りは全員JR九州など関係団体からの出向者とのこと。広域観光の充実が叫ばれている中で、この取り組みは一つのモデルケースではないかと感じた。

(3) 鹿児島県屋久島町

日時 7月26日(木) 16時15分～17時15分

対応者 商工観光課 竹之内課長、木原課長補佐

ア 屋久島町の概要

人口 12,700人 (屋久島12,586人・口永良部島114人)

面積 540km² (屋久島504km²・口永良部島35.8km²)

屋久島は平成5年、島の21%が世界自然遺産地域に登録された。屋久島の周囲は132km、車で回れば約3時間。アクセスは、鹿児島から飛行機で30分、高速船で2時間、フェリーで4時間。

イ 事業の背景・概要・課題等

屋久島が世界自然遺産地域に指定された際に評価されたのは以下の通り。島嶼ながら標高2000mに迫る山岳地帯から海岸線に至る際立った標高差が存在する。樹齢3000年に及ぶスギを含む原生的な天然林を有する。北緯30度付近では稀な高山を含む島嶼生態系、原生的天然林が海岸から山頂部まで連続して分布している事。以上の様に、亜熱帯の島ながら山頂は北海道並みの気候で、日本の自然の縮図を見ることができる。

入込客数はH19の約406,000人がピーク。世界遺産登録から14年で約2倍となったが、その後8年間で7割が減少した。

世界遺産登録地域管理に係る各種の法的担保(規制)がある。自然環境保全法(環境省)、自然公園法(環境省)、国有林野管理経営規定(林野庁)、文化財保護法(文化庁)、登山道整備(鹿児島県)、登山道維持管理(屋久島町)。このように各種法的担保(規制)があることによって屋久島の自然環境が担保されている一方、規制が厳しいために何を行うにも監督官庁との調整に時間と手間がかかるという問題もある。

利用者の増加及び利用マナーの低下を原因として次のような課題が発生している。路上駐車増加、特定時期・場所の混雑、植生の荒廃、ト

イレのし尿増大、トイレ利用環境の悪化、救急活動の増加など。特に縄文杉ルートでの混雑状況は激しく、ピーク時の女性のトイレ待ちは30分から40分に及ぶなど深刻な状況となっている。

登山者の増加により山岳部のトイレし尿処理は、従来実施してきた現地埋設処理は、屋久島の貧弱な土壌では土壌分解速度が追い付かず、し尿が分解されず流出し、悪臭・ハエの発生、自然環境や島民の水源にまで影響する恐れが生じた。そこで平成20年度から20Lのポリタンクに移し替え、背負子で人力搬出し、し尿処理施設での処理する方式に変更した。平成20年度から28年度の総排出量は73,475L、20Lポリタンクで約3,673本。

し尿処理問題は地元にとって大きな負担となっている。この他にも、改善されない県管理の老朽化した山岳部トイレ、山岳信仰の雰囲気や損なう老朽化した登山道などが課題となっている。

これらの課題を解決する手段として、屋久島の美しい自然環境と清らかな水環境を人類共通の財産として末永く受け継ぎ、登山者の皆さんに安心して安全な自然体験を提供するために、全国初となる「世界自然遺産屋久島山岳部環境保全協力金」条例を制定した。（平成29年3月スタート）協力金額は任意であるが、基本額（日帰り入山の場合）1,000円、山中で宿泊予定の場合2,000円となっている。協力金の収納率は7割、昨年度は約6,000万円であった。ほとんどがし尿の回収に費やされている。縄文杉までのバス乗車券に合わせてお願いすると、ほぼ全員の協力がいただけている。

ウ 所感

自然環境を守りながら自然との共生を最大のテーマとして観光振興を進めている究極の地「世界自然遺産屋久島」を視察する得難い機会を得ました。屋久島は海岸線から標高2,000mに迫る山岳部を持ち、九州最高峰から8番目までの山岳を島内に持つ特異な島で「洋上アルプス」と呼ばれているそうです。屋久島での最大の課題が登山者のし尿処理とのことで、平成20年度からはし尿を背負子で人力により担ぎ下ろしていると同ったのは驚きでした。山岳を控える松本にも共通する大きな問題があります。北アルプスでは簡易水洗の土壌処理方式をベースとする中でバイオトイレの実験などを進めているようです。

世界自然遺産という特異な自然環境と樹齢3,000年に及ぶスギの天然林が屋久島の最大の魅力である。これを失ったら屋久島は屋久島でなくなる。松本も同じことである。自然環境の保持と観光振興との共生と調和が永遠の課題であると改めて強く再認識させられました。

(1) 公益財団法人 屋久島環境文化財団（屋久島環境文化村センター内）

日 時 7月27日（金） 9時～10時05分

対応者 松村事務局長・副館長、事業課 寺田氏

（二人とも鹿児島県からの派遣職員）

ア 事業の背景・概要・課題等

財団は平成5年3月に鹿児島県と屋久島町の出捐により設立。財団設立の目的は、国際的にも学術的評価の高い自然環境を損なう事なく、何千年にもわたって積み上げられてきた屋久島特有の生活文化を戦略的なイメージとして掲げ、学習や研究によってその価値を見直すことを通じて、屋久島と人とが共生する屋久島ならではの個性的な地域づくりを進める。主な事業は、環境学習・環境形成・屋久島地域づくり支援、交流ホール展示等。

屋久島「里めぐり」事業について伺った。屋久島観光は屋久スギに代表される山岳部中心であるが、環境負荷の軽減と里地への分散化を図るために「里めぐり」事業を平成25年度に立ち上げた。事業内容は、集落散策、収穫体験、郷土料理の食事（@1,000円）地場産業見学など。参加者の参加料は一人当たり1,500円、そのうち90%を集落へ還元している。

参加者は平成25年度282人であったが年々増加して来て平成29年度は787人であった。この事業に参加している島民の感想は「島外の人には感動すると共に、地元の若者は自分の住んでいる集落の再発見、再認識する良い機会となっている」と好評である。

イ 所感

屋久島環境文化財団は屋久島環境文化村センター内に事務局があり、センターは「屋久島自然館」として屋久島の環境や歴史を紹介する博物館となっていた。自然館には1,660歳の屋久スギが展示してあり、触れることができたほか、江戸時代には屋久スギを短冊形に製材し屋根板として大量につくられたなど屋久島の人々の生活実態、屋久島の自然環境の特徴と歴史・文化を学習できる施設であった。日程上屋久島の山岳部へは行けなかった我々にとっては、屋久島の魅力を体系的に学ぶことができた施設であった。屋久島を訪れる人々がみな長期間滞在し、屋久島の魅力を満喫できるわけではない。屋久島の情報発信基地として「屋久島自然館」のような施設は有効だと感じた。